

共立女子大学図書館所蔵絵巻の基礎的研究

——「竹取物語絵巻」「利仁草紙」「異疾之巻物（病草紙模本）」「鳥羽絵巻物（鳥獸戯画模本）」

山本聡美

はじめに

本研究では、共立女子大学図書館が所蔵する近世絵巻のうち、①「竹取物語絵巻」上下2巻、②「利仁草紙」上下2巻、③「異疾之巻物（病草紙模本）」全1巻、④「鳥羽絵巻物（鳥獸戯画模本）」全1巻について、これらを学術資料や教材として活用するための基盤整備を行った。

上記資料は模本を含む近世絵巻とはいえ、いずれもすぐれた作域を示し、美術史や古典文学、日本史などの分野にまたがる学術的価値を有する。加えて、本学においては学生が身近に触れることのできる古典教材として活用する意義も大きい。

ただし、これまでのところ、全巻通した高精細画像や翻刻・解題などが整備されておらず、貴重な資料が十分に生かされているとは言いがたい状況であった。そこで本研究課題では、作品調査・高精細画像の撮影を実施するとともに、「竹取物語絵巻」に關しては、線描による描き起こし図を作成した。以下では、二〇一六年度の研究期間中から現在までに蓄積した成果を報告する。

共同研究「共立女子大学図書館所蔵絵巻の基礎的研究」

はじめに、各作品の基礎データ（解題・法量・詞書の翻刻）を掲載し、箱・表紙・見返しについては全図を、本紙の詞書と絵に關しては部分図を掲載した。なお全長が短い④「鳥羽絵巻物（鳥獸戯画模本）」に關しては、全場面を掲載した。各作品の高精細カラー画像に關しては、将来本学図書館ウェブページにおいて公開予定である。

一 作品紹介

（一）「竹取物語絵巻」上下2巻

蔵書番号：上巻 W721.2/2/1' 下巻 W721.2/2/2

「物語の、出で来きはじめの祖」（『源氏物語』絵合帖）とも称され、十世紀と見られる物語の成立直後から絵入りの物語として鑑賞されていたらしき『竹取物語』であるが、中世以前にさかひる絵巻作例は現存せず、作例は近世以降のものに限られてい¹。

本作は奈良絵本系絵巻で、詞書には金泥によって下絵を描いた

豪華な料紙を用い、発色の良い絵具による絵の格調も高く極めて良質な作例である。成立は、『源氏物語』『伊勢物語』、そして

『竹取物語』などの平安文学に基づく豪華版の絵巻や絵本制作が

流行した十七世とみられるが、同時期に制作された他の現存諸本

と比較しても、完成度の高さでは群を抜いている。詞書や画面に

欠損や錯簡もなく、保存状態も良好である

一七世紀初頭の制作と見られるチェスター・ビーティー・ライ

ブラリー所蔵「竹取物語絵巻」は、現存最古本と位置づけられ、

失われた中世「竹取物語絵巻」の図像をうかがい得る、重要作例

である。先行研究においては、一つの段に複数の場面を連続させ

る画面構成や、かぐや姫昇天を描く場面選択などが、他の諸本に

見られない特徴として注目されている。

一方、共立本はこれにやや遅れる一七世紀後半ごろの成立と見

られ、同じころの作例と思しき国学院大学図書館と立教大学図書

館がある。

共立本・國學院本・立教本においては、詞書の異同や場面選択

に一定の共通性を指摘することができ、これら三本を通じて、近

世竹取物語絵巻の「定型」が成立していく過程が浮き彫りとな

る。また、先行研究において、国学院本の詞書や絵が正保三年

(一六四六) 刊本に近いという点が指摘されており、共立本も

同本と底本としている可能性が高い。

【法量・上巻】

見返し……縦33・7cm×横27・7cm (八双含)

本紙……縦33・7cm×全長1642・6cm

第一紙(詞) ……48・4cm

第二紙(詞) ……28・6

第三紙(絵) ……49・5

第四紙(詞) ……48・7

第五紙(詞) ……48・9

第六紙(詞) ……48・7

第七紙(詞) ……19・1

第八紙(絵) ……94・8

第九紙(詞) ……48・9

第十紙(詞) ……48・5

第十一紙(詞) ……29・8

第十二紙(絵) ……48・8

第十三紙(詞) ……48・9

第十四紙(詞) ……16・3

第十五紙(絵) ……49・3

第十六紙(詞)	……	49・0
第十七紙(詞)	……	48・9
第十八紙(詞)	……	13・9
第十九紙(繪)	……	49・1
第二十紙(詞)	……	48・3
第二十一紙(詞)	……	48・9
第二十二紙(詞)	……	49・0
第二十三紙(詞)	……	40・3
第二十四紙(繪)	……	48・5
第二十五紙(詞)	……	48・8
第二十六紙(詞)	……	31・8
第二十七紙(繪)	……	48・5
第二十八紙(詞)	……	48・7
第二十九紙(詞)	……	48・9
第三十紙(詞)	……	21・0
第三十一紙(繪)	……	48・2
第三十二紙(詞)	……	49・1
第三十三紙(詞)	……	48・9
第三十四紙(詞)	……	49・1
第三十五紙(詞)	……	48・8

第三十六紙(繪)	……	48・4
第三十七紙(詞)	……	16・7
第三十八紙(軸付)	……	12・6

【法量・下巻】

見返し……縦33・7cm×横27・7cm(八双舎)

本紙……縦33・7cm×全長1641・5cm

第一紙(詞)	……	47・2cm
第二紙(詞)	……	49・0
第三紙(繪)	……	49・4
第四紙(詞)	……	48・2
第五紙(詞)	……	15・7
第六紙(繪)	……	49・0
第七紙(詞)	……	49・1
第八紙(詞)	……	49・0
第九紙(詞)	……	46・8
第十紙(詞)	……	46・9
第十一紙(詞)	……	49・0
第十二紙(繪)	……	49・0
第十三紙(詞)	……	48・7

共同研究「共立女子大学図書館所蔵絵巻の基礎的研究」

第十四紙(詞) ……	48・9	第三十四紙(詞) ……	93・6
第十五紙(詞) ……	48・5	第三十五紙(詞) ……	48・6
第十六紙(詞) ……	48・7	第三十六紙(詞) ……	18・4
第十七紙(絵) ……	49・2	軸付紙なし	
第十八紙(詞) ……	48・4		
第十九紙(詞) ……	33・8		
第二十紙(絵) ……	93・6		
第二十一紙(詞) ……	48・4		
第二十二紙(詞) ……	48・5		
第二十三紙(詞) ……	48・6		
第二十四紙(詞) ……	48・5		
第二十五紙(詞) ……	14・1		
第二十六紙(絵) ……	48・1		
第二十七紙(詞) ……	48・5		
第二十八紙(詞) ……	26・5		
第二十九紙(詞) ……	15・9		
第三十紙(絵) ……	48・7		
第三十一紙(詞) ……	48・6		
第三十二紙(詞) ……	48・4		
第三十三紙(絵) ……	20・0		

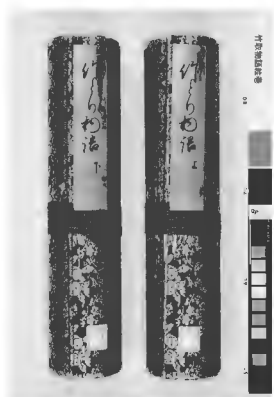


図1-2



図1-1



図1-4



図1-3

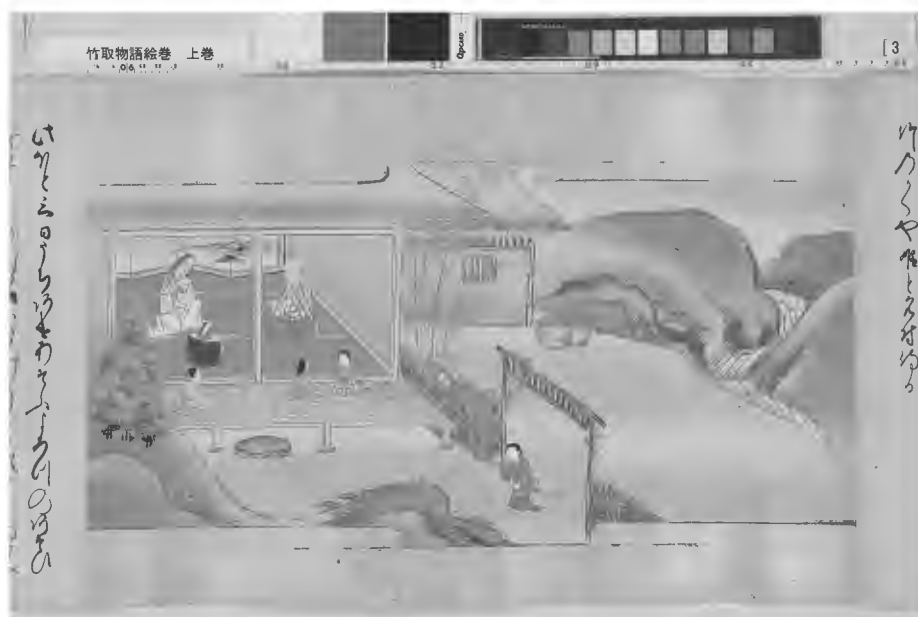


図1-5 「竹取物語絵巻」上巻第1段絵

(二)「利仁草紙」上下2巻

蔵書番号：上巻 W721.2/10/1、下巻 W721.2/10/2

『今昔物語集』巻二六第一七「利仁將軍若時從京敦賀將行五位語」や、『宇治拾遺物語』巻一第一八「利仁芋粥事」に取材した

絵巻。藤原基経（八三六〇九二）に仕える二人の家来、藤原利

仁（生没年不詳）と五位なる人物を通じて、都鄙の文化の違いを

描く。基経が催した大饗に出された芋粥を「飽くほど食べたい」

と願う五位を、越前敦賀に所領を持つ豪族の娘婿となっている利

仁が妻の実家に連れてゆき、膨大な量の芋粥でもてなす。芥川龍

之介『芋粥』を通じて、現代でも広く知られた説話である。

【法量・上巻】

見返し……縦30・3 cm×横34・3 cm（八双舎）

本紙……縦30・3 cm×全長1400・4 cm

第一紙……159・0 cm

第二紙……168・6

第三紙……168・4

第四紙……168・8

第五紙……168・5

第六紙……168・7

第七紙……156・2

第八紙……168・5

第九紙……73・7

軸付紙……8・0

【法量・下巻】

見返し……縦30・4 cm×横33・0 cm（八双舎）

本紙……縦30・3 cm×全長1355・2 cm

第一紙（絵）……79・0 cm

第二紙（絵）……168・6

第三紙（絵、間に余白アリ）……168・5

第四紙（絵）……168・5

第五紙（絵、間に余白アリ）……168・5

第六紙（絵）……167・5

第七紙（絵）……167・0

第八紙（絵、余白アリ）……134・4

第九紙（絵）……133・2（奥付有）「右利人草紙上下二

巻／天保十四年癸卯仲秋成／福山侍画師 六十六翁相覧

（朱印）

軸付紙……8・5

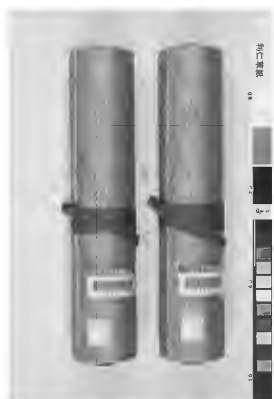


図2-2



図2-1



図2-4



図2-3



図2-5 「利仁草紙」下卷第△段絵

(三)「異疾之巻物(病草紙摸本)」全1巻

蔵書番号：W721.2/54

【法量】

見返し……縦26・4cm×横22・5cm(八双含)

内題……縦26・8cm×横9・2cm

本紙……縦26・9cm×全長750・5cm

「病草紙」の原本は、「地獄草紙」や「餓鬼草紙」と一連の六道絵巻として、後白河院(一一二七〜九二)の周辺で成立したことが有力視される。かつて名古屋の関戸家に伝来した十七場面、その連れとみられる断簡をあわせた二十一場面が現存し、京都国立博物館などで分蔵されている。各場面には、歯痛や腹痛など一般的な症状に加え、二形、白子、侏儒など、かつては業病とも見なされていた先天性疾患をも含む、多種多様な症例が表されている。各種の病は、経典・医書・仏教説話などを広く参照したものと思われ、平安時代の貴族社会において共有されていた、病に関する宗教的・医学的知識を基盤として成立した絵巻といえる。

ここに紹介するのは、江戸時代の模本一巻である。「小舌の男」「風病の男」「居眠りの男」「鼻黒の父子」「二形」「尻の穴のない男」「息の臭い女」「尻の穴あまたある男」「眼病治療」「頭のない男」「顔にあざのある女」「歯の揺らぐ男」「侏儒」「白子」「不眠の女」「顔にあざのある女」「陰虱の男女」の全一七場面が構成されている。詞書と絵を正確に写しており、部分的に彩色もある。原本の持つ描線や色彩の雰囲気をよく伝えており、原本から直接の模写である可能性が高い。

第一紙……	47・5cm
第二紙……	39・5
第三紙(詞書二行)……	10・5
第四紙……	40・9
第五紙……	40・5
第六紙……	52・8
第七紙……	40・5
第八紙……	40・0
第九紙……	40・5
第十紙(詞のみ)……	15・0
第十一紙……	40・5
第十二紙……	39・5
第十三紙……	41・0
第十四紙……	40・0
第十五紙……	40・6

第十六紙……	39・4
第十七紙……	40・8
第十八紙（詞のみ）……	5・5
第十九紙……	40・0
第二十紙……	40・0
第二十一紙……	15・5
軸付紙……	13・2

「異疾之卷物（病草紙模本）」詞書翻刻

第一段（小舌の男）

こしたといひてしたのねにちぬさき
 したのやうなるものかさなりておい、
 つることありやまひおもくなりぬれ
 ははらにはうゑたりといへともものむど飲
 食をうけすおもくなりぬれはしぬる
 ものなり

第二段（風病の男）

ちかころ男ありけり風病によりて

ひとみつねにゆるきけり厳寒に
 はたかにてゐたる人のふるひわ
 な、くやうになむありける

第三段（居眠りの男）

なま良家子なるおとこありけ
 りすこしもしまれはゐなから
 ねふる人のいかなることをせむも
 するへくもなしましらゐのときま
 ことにみくるしかりけりこれも病
 なるへし

第四段（鼻黒の父子）

大和国平群のこほり幸山といふところ
 におとこありはなのさきすみを
 ぬりたるやうにくろかりけり子孫子
 あひつきてみなくろかりけり

第五段（二形）

なかころみやこにつゝみをくひに

かけてうらしありく男ありかたち

おとこなれとも女のすかたに、たること

ともありけり人これをおほつかなかり

てよるねいりたるにひそかにきぬを

かきあけてみければ男女の根ともに

ありけりこれ二形のものなり

第六段（尻の穴のない男）

あるおとこしりのあな、くて屎くちよ

りいつくさくたえかたくてすちなかり

けり

第七段（息の臭い女）

宮こに女ありみめかたちかみすか

たあるへかしかりければ人さうしにつ

かひけりよそにみるおとここ、ろを

つくしけれともいきのかあまりくさく

てちかつきよりぬれははなをふさぎ

てにけぬた、うちゐたるにもかた

わらによる人はくさ、たえかたかりけ

り

第八段（尻の穴あまたある男）

あるおとこむまれつきにてしりのあ

なあまたありけりくそまるときあな

ことにて、わつらはしかりけり

第九段（眼病治療）

ちかころやまとのくになるおとこめ

のすこしみえぬことのありけるをな

けきゐたるほとにかとよりおとこひ

とりいりきたりあれはなにもそのそといへは

我は目のやまひをつくろふくすしなり

と云いゑあるじしかるべき神仏のたす

けかとおもひてよひいれつこのおとこめ

をひきあけてよく見て針してよか

るへしとて針をたてついまはよくなり

なむとていて、いぬその、ちはいよく見

えさりけりつひにかためはつふれ

はてにけり

第十段（頭のあがらない乞食法師）

ちかころ宮こにくひのほねこはくて
こしをそらしてひとみをゆるかさぬかき
りはすこしもかしらをあくることかな
はすあけくれうつふきてありく乞
食法師あり

第十一段（霍乱の女）

霍乱といふ病ありはらのうち苦痛
さすかことし口より水をはき尻より
痢をもらす悶絶顛倒してまことにた
えかたし

第十二段（歯の揺らぐ男）

おとこありけりもとよりくちのうち
のはみなゆるきてすこしもこわき
ものなとはかみわるにおよはずなま
しるにおちぬくることはなくて
ものくふ時はさはりてたえかたかり

けり

第十三段（侏儒）

侏儒ときくいてく。食をこひて京都
をありくわらはへしりにつきて
わらひのるみかへりてはらたちいへとも
いよくおこつきわらふ

第十四段（白子）

しろこといふものありおさなくより
かみもまゆもみなしろくめにくろ
まなこもなしむかしよりいまにいた
るまでまゝよにいてくることあり

第十五段（不眠の女）

山とのくにかつら木のしものこほりに
かたをかといふところに女ありとりたて、
いたむところなけれどもよるになれ
ともねいらるゝことなしよもすがらお
きゐてなによりもわひしきことな

りとそいひける

第十六段（顔にあざのある女）

ある女かほにあざといふものありてあざ
ゆふこれをなけきけりあさはうちまか
せて人の身にあるものなれとも閑所は
くるしみなしかほなどにつきぬれは
人にましはりはれなとふるまふこと
かなふへくもなければまことにかたはな
り

第十七段（陰風の男女）

陰毛にむしある女ありこれをは
つひしらみと云おとここれにちかつ
きぬれはかならずうつる一夜のうち
にあまたになりてひけまゆまつけ
まてものほるかゆさたえかたし
とりすてむとすれともはたえにくひ
いりてとられすかみそりにて毛を
のそきてたすかるとかや



図3-2



図3-1

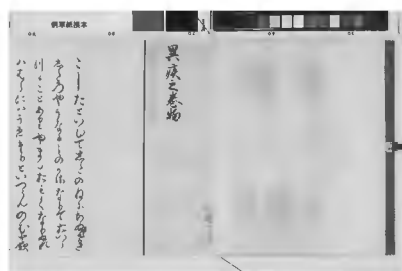


図3-4

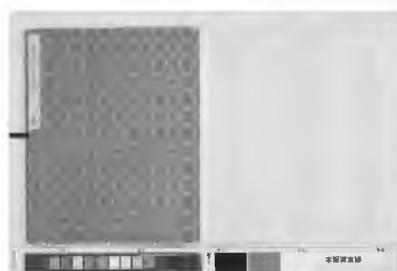


図3-3



図3-5 「異疾之巻物 (病草紙模本)」第1段

(四)「鳥羽絵巻物(鳥獸戯画模本)」全一巻

蔵書番号：721.2/60

京都・高山寺に伝来する「鳥獸戯画」は、甲・乙・丙・丁の四巻で構成される白描絵巻である。詞書はなく、制作の経緯については謎が多い。現存する四巻には描法や主題に開きがあり、平安時代末期と見られる甲巻成立の後に、他の巻が十三世紀を通じて断続的に描き継がれたものと思われる。

また、中世末期から近世にかけて、甲巻を中心に数多くの模本が制作されており、本学図書館所蔵の模本もそのようなもの一種として位置付けられる。本稿にはその全場面を掲載した。

本作に含まれる場面は、概ね甲巻に存在する場面から模写されたものである。ただし、①全場面を完備してはいないこと、②丙巻第十五紙に描かれた蛙の田楽場面(図4-9)も含まれていること、③「鳥獸戯画」の現存部分には存在しない兎と猿の囲碁場面(図4-7)が含まれていることに特徴がある。

特に、③については、同様の場面が、十六世紀の模写と見られるホノルル美術館蔵「鳥獸戯画模本(長尾家旧蔵本)」や、狩野探幽(一六〇二〜七四)によって模写された京都国立博物館蔵「鳥獸戯画模本(探幽縮図のうち)」にもあることから、該当場面は近世初頭頃まで原本に存在していた可能性が高い。そのような

意味で、本作は、原本の失われた図様を復元する手がかりとなる重要な模本であるといえる。

模写の時期に関しては、左記の観点から、十七世紀の前半頃と推定しておきたい。本作が、いずれかの模本からのさらなる写しである可能性を考慮する必要があるものの、「鳥獸戯画」甲巻に備わる張りのある闊達な描線の特徴を良く捉えており、原本に基づく模本である可能性は十分に考えられる。さらに、ホノルル本や探幽縮図本と比較しても、本作における細部の描き込みは緻密である。

【法量】

見返し……縦27・6cm×横28・5cm(八双含)紐とれ。

本紙……縦27・5cm×全長281・9cm

第一紙……36・0cm(九曜文庫の印アリ)

第二紙……48・8

第三紙……49・0

第四紙……48・9

第五紙……49・9

第六紙……49・3(軸付ナシ)

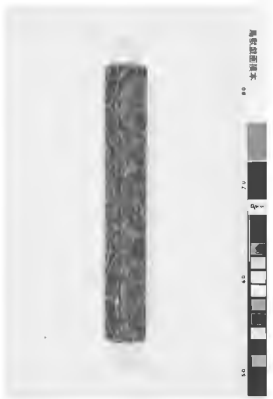


図4-3



図4-2



図4-1

共同研究「共立女子大学図書館所蔵絵巻の基礎的研究」

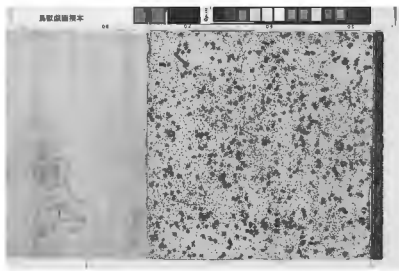


図4-5

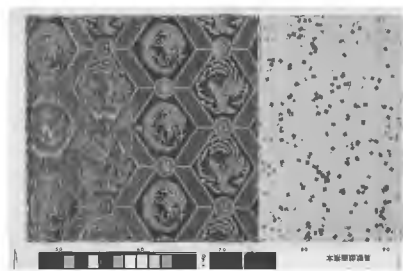


図4-4

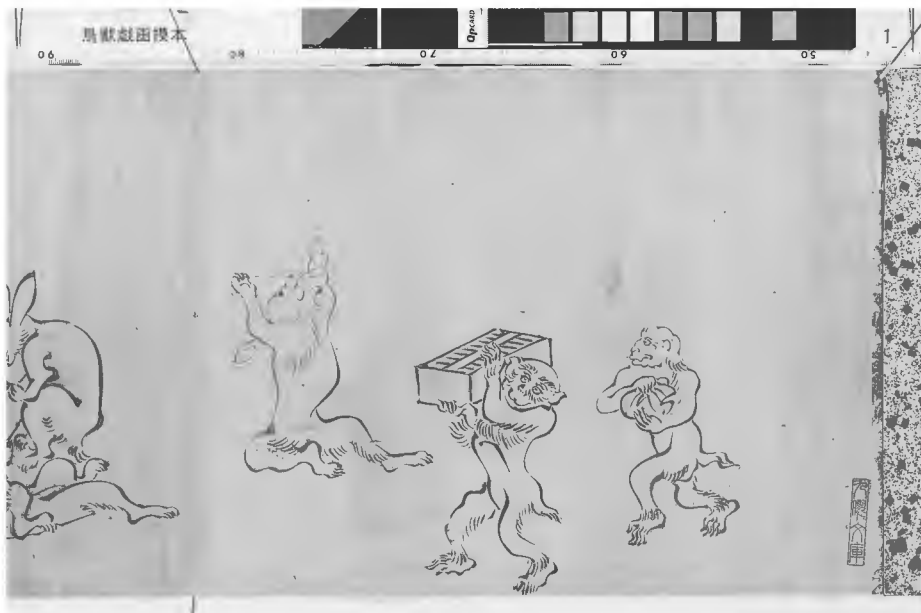


図4-6 「鳥羽絵巻物（鳥獸戯画模本）」

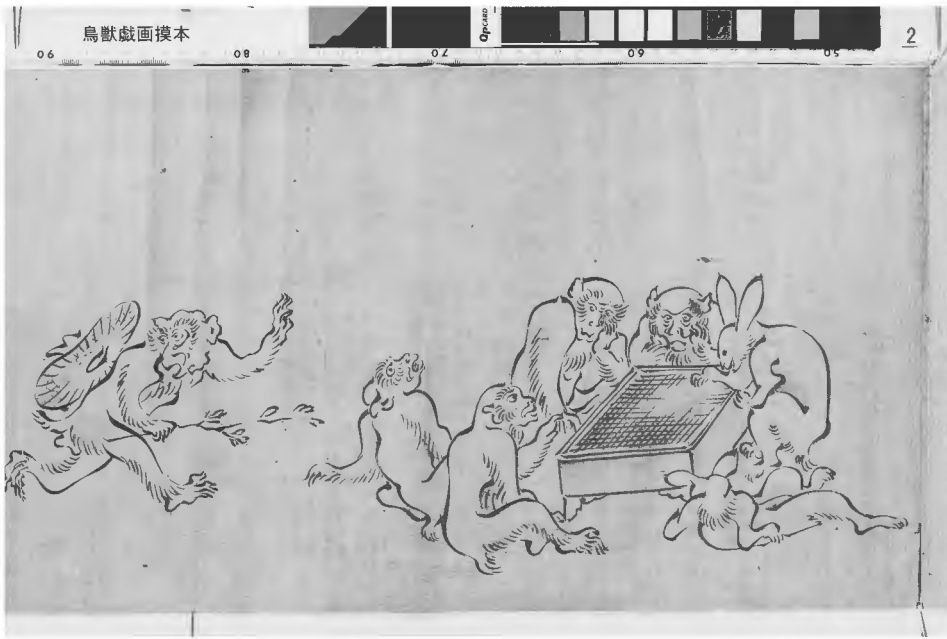


图4-7



图4-8



図4-9

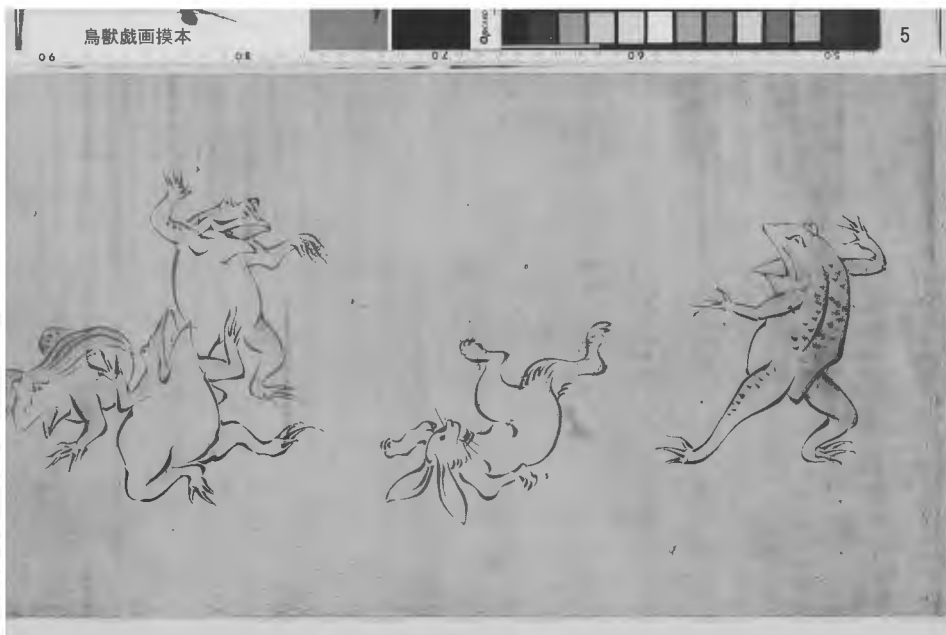


図4-10

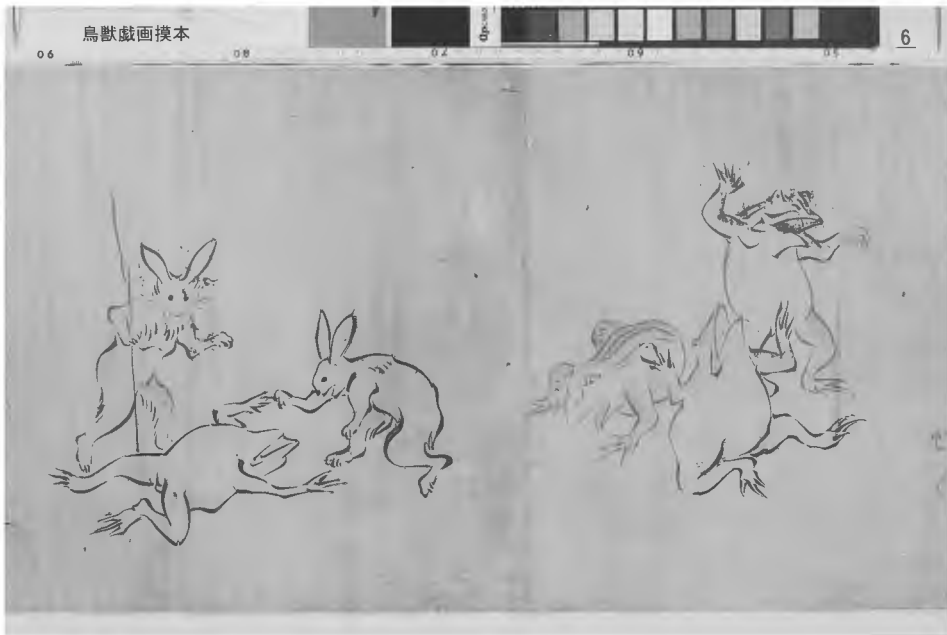


图4-11



图4-12



図4-13

共同研究「共立女子大学図書館所蔵絵巻の基礎的研究」

二 「竹取物語絵巻」を用いた授業の実践

(一) 立体化資料（触れる絵巻）の作成

本研究課題に先立って、平成二十六年（二〇一四）総合文化研究所研究助成「変体仮名教材作成の研究」（代表・岡田ひろみ）にて、本学図書館所蔵「竹取物語絵巻」の予備調査を行い、変体仮名教材作成の基礎整備が進められていた。これを足掛かりとし、本研究では、新たに撮影した高精細画像を用いて全場面の詳細な描き起こし図を作成し、これに基づく「竹取物語絵巻」完全立体版を完成させた⁴⁾。

(二) 立体化資料を用いた授業の実践

この立体版「触れる絵巻」を、筆者は二〇一五年度から、本学文芸学部専門科目である「日本美術史演習」（通年科目）にて利用を開始し、全場面が完成した二〇一六年度には、当時文芸学部四年に在籍していた尾崎葉氏が、日本美術史及び古典文学に関する卒業論文を執筆する際の研究材料として利用した。

視覚障碍のある同氏は、本資料を用いた「触読」という方法を使って「竹取物語絵巻」の詞書を読み、絵を分析した。

「日本美術史演習」において、晴眼者の学生たちは、詞書と画面のコピーを手元に置いて、『字典かな』（笠間書院）と『新日本

古典文学大系』（一七、岩波書店）所収の活字本を参照しながら本文を読み、さらに詞書と画面内容の対応関係などの分析を行った。毎回の授業で、一人十五行〜二〇行程度を課題として割り振って輪読する形式で進めた。新大系版の本文を読めば、そこに答えが書いているようなものであるので、変体仮名の学習が初めてという学生もそれを参照しながら翻刻に取り組むことができた。ただし、共立本は新大系版の底本である天理大学附属図書館本系統の本文とは異同が多く、最終的には自ら変体仮名を読解しなくては完全な翻刻ができない。共立本を変体仮名学習の教材として用いる利点がこの点にあった。つまり、本作に関する完全な翻刻資料は世の中に存在せず、学生一人ひとりが取り組んでいる翻字が、世界で最初の翻刻資料となる臨場感を体験することができ、この授業での翻刻作業を通じて、共立本における明らかな誤写なども発見でき、写本には各々個性があることを、学生が自らの経験を踏まえて理解することに結びついた。

一方、視覚障碍のある尾崎氏も、立体化教材を用いて他の学生と同じペースで学習をすることができた。『字典かな』の代わりに、二〇一五年度までに日本語日本文学コースにて制作した立体字典を用い、新大系版の代わりに、点訳されている角川ソフィア文庫版の本文を参照した。

なお、尾崎氏は卒業論文の一環として、共立本詞書の全文の翻刻を完成させた。共立本については、これが現在のところ唯一の翻刻資料であり、今後の研究材料とするため、以下では、尾崎氏の作成した翻刻を全文掲載する。

〔三〕 共立女子大学図書館所蔵「竹取物語絵巻」詞書翻刻

【上巻】

〔第一段〕

- (一) 今はむかし竹とりのおきなといふものありけり
- (二) 野山にましりて竹をとりつゝよろつ
- (三) ことにつかひけり名をはさるきのみやつこ
- (四) となんいひけるその竹の中よりもとひかる竹
- (五) なん一すちありけりあやしかりてよりてみ
- (六) るにつゝの中ひかりけりそれをみれば三
- (七) すんはかりなる人うつくしうてゐたりおきな云
- (八) やうわれあさこと夕ことにみる竹の中にお
- (九) はするにてしりぬ子になり給ふへき人なめり
- (一〇) とて手にうち入て家へもちてきぬめの女
- (一一) にあつけてやしなはすうつくしきかきりなし
- (一二) いとおさなければここに入てやしなふ竹とり

- (一三) のおきな竹とるにこの子を見つけてのち
- (一四) に竹取にふしをへたててよことにこかねある
- (一五) 竹をみつくる事かさなりぬかくておきなやう
- (一六) やうつてくゆたかになりゆく此ちこやしなふほ
- (一七) とにすくくとおほきになりまざる三月
- (一八) はかりになるほとによきほとなる人になりぬ
- (一九) れはかみあけなとさうしてかみあけさせ
- (二〇) きちやうのうちよりもいたさすいつきし
- (二一) つきやしなうほとにこのちこのかたちのけ
- (二二) うらなる事世になく屋のうちはくらきと
- (二三) ころなくひかりみちたりおきなこ、ちあし
- (二四) くくるしき時もこの子をみればくるしきこ
- (二五) ともやみぬはらた、しき事もなくさみけり
- (二六) おきな竹をとる事久しく成さかへにけり此
- (二七) 子いとおほきに成ぬれば名をみむろのいん
- (二八) へのあきたをよひてつけさすあきたなよ
- (二九) 竹のかくや姫と名付け侍る

第一段絵

〔第二段〕

- (一) 此ほと三日うちあけあそふよろつのおそひ
 (二) をそしけるおとこはうけきはすよひつとへ
 (三) ていとかしこくあそふ世かいのおのこあてなる
 (四) もいやしきもいかてこのかくやひめをえてし
 (五) かなみてしかなとをとに聞きめて、まとふそ
 (六) のあたりのかきにも家の外にもをる人たに
 (七) たはやすくみるましき物をよるはやすきいも
 (八) ねすやみの夜にもこ、かしこよりのそきかいま
 (九) みまとひあへりさるときよりなんよはひとは
 (一〇) いひける人の物ともせぬところにまとひあり
 (一一) けともなにのしるしあるへくもみえず家の人と
 (一二) もに物をたにいはんとていひかくれともこと
 (一三) もせずあたりをはなれ君たち夜をあかし日
 (一四) をくらす人おほかりけるをろかなる人はよう
 (一五) なきありきはよしなかりけりとてこす成に
 (一六) けりその中になをいひけるはいろこのみと
 (一七) いはる、人五人おもひやむときなくよるひる
 (一八) きたりけりその名一人は石つくりの御子
 (一九) 一人はくらもちの御子一人は左大臣あへの
- (二〇) みむらし大納言一人は大伴のみゆき中納言
 (二一) 一人はいそのかみのもろたり此人くなりけり
 (二二) 世中におほかる人をたにすこしもかたち
 (二三) よしと聞てはみまほしうする人たち成けれ
 (二四) はかくやひめかみまほしうてもものもくはず
 (二五) おもひつ、かの家に行てた、すみありきけ
 (二六) れともかひあるへくもあらず文をかきて
 (二七) やれとも返事もせずわひうたなどかきて
 (二八) つかはすれともかひなしと思へとも霜月極
 (二九) 月のふりこほりみな月のてりはた、くに
 (三〇) もさわらすきたりこの人くあるときは竹取
 (三一) をよひ出してむすめを我にたへとふしお
 (三二) かみ手をすりの給へとをのかなさぬ子なれば
 (三三) 心にもしたかへすとなんいひて月日を、くる
 (三四) か、れは此人く家にかえりてものをいのりを
 (三五) しくわんを立おもひやむへくもあらずさり共
 (三六) つひに男あはせさらんやはと思ひてたの
 (三七) みをかけたりあなち心に心さしを見えあり
 (三八) くこれを見つけておきなかくやひめにいふや
 (三九) う御身はほとけへんけの人と申なからこれほと

- (四〇) おほきさまてやしなひたてまつる心さし
 (四一) をろかならすおきな申さん事き、給ひ
 (四二) てんやといへはかくやひめ何ことをかの給はんこ
 (四三) とはうけ給はらざらんへんけのものにて侍りけん
 (四四) みともしらすおやとこそ思ひ奉れといふおき
 (四五) なうれしくもの給ふものかなといふおきな年
 (四六) 七十にあまりぬけふともあすともしらすこの
 (四七) 世の人は男は女にあふ事をす女はおとこにあ
 (四八) ふ事をすその、ちなん門ひろくもなり侍る
 (四九) いかてかざる事なくてはおはせんかくやひめの
 (五〇) いはくなんてうさる事かし侍らんといへはへん
 (五一) けの人といふとも女のみもち給へりおきな
 (五二) あらんかきりはかうてもいませかしこの人く
 (五三) の年月をへてかうのみいましつゝの給ふこと
 (五四) を思ひさためてひとりくにあひ給へやと
 (五五) いへはかくやひめいはく能もあらぬかたちを
 (五六) ふかき心もしらてあた心つきなほのちくやし
 (五七) き事もあるへきをとおふはかりなり世のかし
 (五八) こき人なりともふかき心さしをしらてはあひ
 (五九) かたしとなん思ふといふおきないはく思ひの

- (六〇) ことくもの給ふかなそもくいかやうなる心
 (六一) さしあらん人にかあはんとおほすかはかり心さ
 (六二) しをろかならぬ人くこそあめれかくや姫
 (六三) のいはくかはかりのふかきをかみんといはんいさ
 (六四) さかかのことなり人のころさしひとしかんなり
 (六五) いかてか中におとりまさりはしらむ五人の中に
 (六六) ゆかしきものを見せ給へらんに
 (六七) 御こ、ろさしまさりたり
 (六八) とてつかふまつらんと
 (六九) そのおはすらん
 (七〇) 人くく申給へ
 (七一) といふ

第二段絵

〔第三段〕

- (一) よき事なりとうけつ日くる、ほとれいの
 (二) あつまりぬ人くあるいはふえをふき或は歌
 (三) をうたひ或はしやうかをしあるひはうそを
 (四) ふきあふひをならしなとするにおきな出

- (五) ていはくかたしけなくきたなけ成所に年
- (六) 月をへてものし給ふ事ありかたくかしこま
- (七) ると申おきなこのちけふあすとも知らぬ
- (八) をかくの給ふ君たちにもよく思ひさためて
- (九) つかふまつれと申もことはりなりいつれも
- (一〇) おとりまさりおはしまさねは御心さしのほとは
- (一一) みゆへしつかうまつらんことはそれになんさたむ
- (一二) へしといへはこれよき事也人のうらみあるまし
- (一三) といふ五人のひとくもよき事也といへはおき
- (一四) ないりていふかくやひめいしつくりの御子には
- (一五) ほとけの御いしのはちといふものありそれを
- (一六) とりて給へといふくらもちの御子にはひかしの
- (一七) うみにほうらいといふ山あるそれにしろかね
- (一八) を根としこかねをくきとし白き玉をみとして
- (一九) 立てる木ありそれ一えたおりて給はらんと
- (二〇) いふ今ひとりにはもろこしにある火ねすみのかは
- (二一) きぬを給へ大伴の大納言にはたつのくひに
- (二二) 五しきにひかる玉ありそれをとりにて給へいそ
- (二三) のかみの中納言にはつはくらめのもたるこ
- (二四) やすのかひとりて給へといふおきなかたきこと
- (二五) にこそあなれこのくに、あるものにもあらずかく
- (二六) かたきことをはいかに申さんといふかくやひめな
- (二七) にかかたからんといへはおきなどもあれかくもあ
- (二八) れ申さんとして出てかくなん聞ゆるやうに見
- (二九) 給へといへは御子たちかんたちめ聞ておいらか
- (三一) にあたりよりたになありきそとやはの給はぬと
- (三二) いひてうんしてみなかへりぬなを此女みては世
- (三三) にもてこぬものかはと思ひめくらしていしつくり
- (三四) の御子は心のしたくある人にて天ちくに二つと
- (三五) なきはちを百千里のほといきたりともい
- (三六) かねかかるとるへきと思ひてかくやひめのもとに
- (三七) はけふなんてんちくへいしのはちとりにゆかると
- (三八) きかせて三年はかり大和のくにとをちのこ
- (三九) ほりにある山寺にひんするのまへなるはち
- (四〇) のひたくろにすみつきたるをとりにてしきの
- (四一) ふくろに入てつくり花のえたにつけてかくや
- (四二) ひめの家にもてきてみせければかくやひめ
- (四三) あやしかりてみればはちの中に文ありひろけて
- (四四) みれはうみ山のみちに心をつくしはてないし

- (四五) のはちの涙なかれきかくやひめひかりや有
- (四六) と見るにほたるはかりのひかりたになし
- (四七) をくつゆのひかりをたにもやとさまし
- (四八) をくらの山にて何もとめけん
- (四九) とて返し出すはちを門にすて、此うたの
- (五〇) かへしをす
- (五一) しら山にあへはひかりのうするかと
- (五二) はちをすて、もたのまる、かな
- (五三) とよみて入たりかくやひめ返しもせずなりぬみ、
- (五四) にも聞入さりければいひか、つらひてかへりぬかの
- (五五) はちをすて、またいひけるよりそをおもなきこと
- (五六) をははちをすつとはいひける

第三段絵

〔第四段〕

- (一) くらもちの御子は心たはかりある人にておほや
- (二) けにはつくしの国にゆあゆみにまからんとて
- (三) いとま申てかくやひめの家には玉のえたと
- (四) りになんまかるといはせてくたり給ふにつかう

- (五) まつるへき人くみななにはまてみをくり
- (六) しける御子いとしのひてとの給はせて人も
- (七) あまたゐておはしまさすちかうまつるかきりし
- (八) ていて給ひみをくりの人くみたてまつり
- (九) をくりてかへりぬおはしましぬと人にはみえ給
- (一〇) ひて三日はかりありてこきかへり給ひぬかね
- (一一) てことみな仰たりければその時一つのたから
- (一二) 成けるかたくみ六人をめしとりてたはやすく
- (一三) 人よりくましき家をつくりてかまとをみへ
- (一四) しこめてたかみくらを入給ひつ、御子も同所
- (一五) にこもり給ひて知らせ給ひたる限十六そを
- (一六) かみにくとをあけて玉のえたをつくり給かく
- (一七) や姫の給ふやうにたかはすつくり出ついとかし
- (一八) こくたはかりてなにはにみそかみもていて
- (一九) ぬ舟にのりてかへりきにけりと殿につけ
- (二〇) やりていといたくくるしかりたる様してゐ給へり
- (二一) むかへに人おほく来りたり玉のえたを長ひつ
- (二二) に入てもおほひて持てまいるいつか聞けん
- (二三) くらもちの御子はうとんく糸の花もちての
- (二四) ほり給へりとの、しりけり是をかくやひめ聞

(二五) て我はこの御子にまけぬへしとむねつふれ
 (二六) て思ひけり

第四段絵

〔第五段〕

(一) かゝるほどに門をたゝきてくらもちの御子お
 (二) はしたりとつく旅の御すかたなからおはしたり
 (三) といへはあひたてまつる御子の給はくいのちを
 (四) すてゝかの玉のえたもちてきたるとてかく
 (五) やひめに見せたてまつり給へといへはおきな
 (六) もちて入たり此玉の枝にふみそ付たりける
 (七) いたつらに身はなしつとも玉のえを
 (八) たをらてさらにかへらさらまし
 (九) 是をもあはれとも見てをるに竹とりのおきな
 (一〇) はしり入ていはく此御子に申給ひしほうらい
 (一一) の玉のえたを一つのところをあやまたすもて
 (一二) おはしませり何をもちてとかく申へきたひの
 (一三) 御すかたなからわか御家へもより給はずしておはし
 (一四) ましたりはやこの御子にあひつかうまつり給へ

(一五) といふに物もいはすつらつえをつきていみ
 (一六) しくなけかしけに思ひたりこの御子今さへ
 (一七) 何かといふへからすといふまゝにえんにはひの
 (一八) ほり給ぬおきなことわりに思ふこのくに、みえ
 (一九) ぬ玉の枝なり此たひはいかてかいなひ申さん人
 (二〇) さまざまよき人におわすなといひあたりかくや
 (二一) ひめのいふやうおやのゝ給ふ事をひたふるに
 (二二) いなひ申さんことのいとをしさに取りかたきもの
 (二三) をかくあさましくもて来る事をねたく思ひ
 (二四) おきなねやのうちしつらひなとすおきな
 (二五) 御子に申やういかなる所にかこの木は侍けん
 (二六) あやしくうるはしくめてたき物にもと申御子
 (二七) こたへての給はくさおと、しの二月の十日こ
 (二八) ろに難波より舟にのりて海中に出てゆかん
 (二九) 方もしらすおほえしかと思ふ事ならて世中
 (三〇) にいき何かせんと思ひしかはた、むなしき風
 (三一) にまかせてありくいのちしなはいか、はせん生
 (三二) てあらん限かくありきてほうらいといふらん山
 (三三) にあふやと海にこきた、よひありきて我
 (三四) の中をはなれてありきまかりしにある時は

- (三五) なみあれつゝうみのそこにも入ぬへくあると
- (三六) きには風につけてしらぬ国に吹よせられてお
- (三七) へのやうなる物出来てころさんとしきある時
- (三八) にはこしきかた行末もしらてうみにまきれんとし
- (三九) き時にはかてつきて草のねをくいものとし
- (四〇) あるときはいはんかたなくむくつけゝなるもの
- (四一) のきてくひかゝらんとしきあるときはうみ
- (四二) のかひをとりていのちをつくたひのそらに
- (四三) たすけ給ふへき
- (四四) 人もなきところにいるく
- (四五) のやまひをして
- (四六) 行事そらも
- (四七) おほえすふねのゆくにまかせ
- (四八) てうみにたゝよひて

第五段絵

- 〔第六段〕
- (一) 五百日といふたつのこくはかりにうみの中に
 - (二) わつかに山みゆ舟の中をなんせめてみる

- (三) うみのうえにたゝよへる山いとおほきにて
- (四) ありその山のさまたかくうるはし是やわか
- (五) もとむる山ならんと思ひてさすかにおそろ
- (六) しくおほえて山のめぐりをさしめくらして二
- (七) 三日はかり見ありくに天人のよそほひしたる
- (八) 女山の中より出きてしろかねのなまるを
- (九) もちて水をくみありくこれを見て舟より
- (一〇) おりてこの山の名を見ありく是を見て舟
- (一一) よりおりてこの山の名を何とか申ととふ
- (一二) 女こたへて云これはほうらいの山なりとこたふ
- (一三) 是を聞にうれしき事限なし此女かくの給ふ
- (一四) は誰そととふ我名はほうかんなどいひてふと
- (一五) 山の中に入ぬその山を見るにさらに上るへ
- (一六) き様なしその山のそはひらをめくれは世中に
- (一七) なき花の木ともたてり金しろかねるり色の
- (一八) 水山よりなかれ出たりそれには色くゝの玉の橋
- (一九) わたせりそのあたりにてりかゝやく木共た
- (二〇) てりその中に此とりてもちてまうてきた
- (二一) りしはいとわろかりしかともの給ひしたか
- (二二) ましかはとこの花を折りてまふて来る也山は

- (二三) かきりなくおもしろし世にたとふへきにあらさ
(二四) りしかと此えたを折てしかはさらに心もとな
(二五) くて舟にのりておひ風ふきて四百余日に
(二六) なんまうてきにし大願力にやなんはより
(二七) きのふ南都にまふてきつるさらにしほに
(二八) ぬれたる衣たにぬきかへなてなん立まふて
(二九) きつるとの給へはおきな聞て打嘆てよめる
(三〇) くれ竹の世々の竹とり野山にも
(三一) さやはわひしきふしをのみみし
(三二) 是を御子聞てこゝらの日ころの思ひわひ侍つる
(三三) 心はけふなんおちぬるとの給ひてかへし
(三四) わかたもとけふかはければわひしきの
(三五) 千くさのかすも忘れぬへし
(三六) との給ひかゝるほどにおとこ共六人つらねて
(三七) にはに出来一人の男ふはさみに文をはさみ
(三八) て申てもんつかさのたくみあやへのうちまろ
(三九) 申さく玉の木をつくりつかふまつりし事
(四〇) こゝくを立て千余日にちからをつくしたる
(四一) 事すくなからすしかるにろくいままた給はらす
(四二) これを給てわるきけこに給せんといひて
- (四三) さゝけたる竹とりのおきなこのたくみらか
(四四) 申事は何ことそとかたふきをり御子はこれを
(四五) かくやひめ聞て此奉る文をとれといひてみ
(四六) れは文に申しけるやう御子の君千日いやしき
(四七) たくみらともろとも同所にかくれる給ひて
(四八) かしこき玉のえたをつくらせ給ひてつかさ
(四九) も給はらんと仰給ひきこれを此ころあんする
(五〇) に御つかひとおはしますへきかくやひめの
(五一) えうし給ふへき成けりとうけ給はりて此宮
(五二) より給はらんと申て給へきなりといふを聞
(五三) てかくや姫くるゝまゝに思わひつる心ちわら
(五四) ひさかへておきなをよひとりていふやうま
(五五) ことにほうらいのきかところ思ひつれかくあ
(五六) さましきそらことにてありければはや返し
(五七) 給へといへはおきなこたふさたかにつくらせたる
(五八) ものと聞つればかへさんこといとやすしとうな
(五九) つきをりかくやひめの心ゆきはてゝあり
(六〇) つる歌の返し
(六一) まことかと聞てみつればことの葉を
(六二) かされる玉の枝にそありける

- (六三) といひて玉のえたもかへしつ竹とりのおき
 (六四) なさはかりかたらひつるかさすかにおほえてねふ
 (六五) りをり御子はたつもはしたるもはしたにて
 (六六) る給へり日の暮ぬれはすへりいて給ひぬかの
 (六七) うれへをせしたくみをはかやくひめよひすへ
 (六八) てうれしき人ともなりといひてろくいと
 (六九) おほくとらせ給ふたくみらいみしくよろこ
 (七〇) ひて思ひつる様にもあるかなといひてかへる道
 (七一) にくらもちの御子のちのなかる、まて調
 (七二) させ給ふろくえしかひもなくみなとりすて
 (七三) させ給ひてければにけうせにけりかくて
 (七四) この御子一しやうのはちこれに過るはあら
 (七五) し女をえすなりぬのみにあらず天下の人
 (七六) のおもはんことのはつかしきこと、の給ひて
 (七七) た、一ところふかき山へ給ぬ宮つかささふら
 (七八) ふ人くゝみな手をわかちてもとめたてまつ
 (七九) れとも御死にもやし給ひけんえ見つけたて
 (八〇) まつらすなりぬ御子の御ともにかくしたま
 (八一) はんとてとしころ見え給はさりけるなりこれ
 (八二) をなん玉さかるとはいひはしめける

第六段絵

〔第七段〕

- (一) 左大臣あへのみむらしはたからゆたかに家
 (二) ひろき人にておはしけるそのとしきたり
 (三) けるもろこしふねのわうけいといふ人のもと
 (四) に文をかきて火ねすみのかはといふなる
 (五) ものかひてをこせよとてつかまつる人の
 (六) 中に心たしかなるをえらひて小野のふさ
 (七) もりといふ人をつけてつかはすもていたり
 (八) かのかくににをるわうけいに金をとらすわう
 (九) けいふみをひろけて見て返事かく火ねす
 (一〇) みのかはころもこの国になきものなりをとには
 (一一) きけともいまたみぬものなり世にあるもの
 (一二) ならはこのくに、ももてまふてきなましい
 (一三) とかたきあきなひなりしかれとももし天
 (一四) ちくにたまさかにもてわたりなはわか長
 (一五) しゃのあたりにとふらひもとめんになき
 (一六) ものならはつかひにそへて金をはかへしたて

第七段絵

- (一七) まつらんといへりかのもろこしふねきけり
(一八) 小野のふさもりまうてきてまうのほる
(一九) といふ事を聞てあゆみとうする馬をもち
(二〇) てはしらせんかへさせ給ふ時に馬にのりて
(二一) つくしよりた、七日にまうて来るふみを
(二二) みるにいふ火ねすみのかは衣からうして人
(二三) を出してもとめてたてまつる今の世にも
(二四) むかしの世にもこのかは、たはやすくなきも
(二五) のなりけりむかしかしこき天ちくのひしり
(二六) 此国にもてわたりて侍けるにしの山てら
(二七) にありとき、をよひておほやけに申てか
(二八) らうしてかいとりてたてまつるあたひの金
(二九) すくなしとこくしつかひに申しかはわうけい
(三〇) か物くはへてかひたり今かね五十両給はるへ
(三一) し舟のかへらんにつけてたひをくれもしかね
(三二) 給はぬものならば彼衣のしちかへしたへといへる
(三三) 事を見て何おほすいまかね少にこそあなれ
(三四) うれしくしておこせたるかなとでもろこしの
(三五) かにむかひてふしおかみ給ふ

〔第八段〕

- (一) 此かはきぬ入たるはこをみれはくさくさのう
(二) るはしきるりをいろえてつくれりかわき
(三) ぬをみれはこんしやうのいろなりけのすえ
(四) にはこかねのひかりしさ、やきたりたからと
(五) 見えうるはしき事ならふへきものなし火に
(六) やけぬ事よりもけうらなる事限なしうへ
(七) かくやひめこのもたり給ふにこそありけれ
(八) との給ひてあなかしことではこに入給ひ
(九) てももの、えたにつけて御身のけさういとい
(一〇) たくしてやりてとまりなんものそとおほし
(一一) て歌よみくはへてもちていましたりそのう
(一二) たは
(一三) かきりなき思ひにやけぬかわころも
(一四) たもとかわきてけふこそはきめ
(一五) といへり家の門にもていたりてたてり竹取
(一六) 出きてとり入てかくやひめに見すかくやひ
(一七) めのかわ衣をみて云うるはしきかはなめりわき

- (一八) てまことのかわならんとしらす竹取こたへてい
 (一九) はくともあれかくもあれまつしやうしいれたて
 (二〇) まつらん世中にみえぬかはきぬのさまなれば
 (二一) これをとおもひ給ひねないたくわひさせ
 (二二) 給ひたてまつらせ給ふそといひてよひ
 (二三) すへたてまつれりかくよひすへてこのた
 (二四) ひはかならずあはんと女の心にも思ひをり
 (二五) このおきなはかくやひめのやもめなるをな
 (二六) けかしければよき人にあわせんと思ひはかれ
 (二七) とせちにいなといふ事なればえしひねはこと
 (二八) はり也かくやひめおきなにいほくこのかは衣は火
 (二九) にやかんにやけすはこそまことならめとおもひて
 (三〇) 人のいふことにもまじめ世になきものなれば
 (三一) それをまこと、うたかひなく思はんと給ふ
 (三二) なをこれをやきて心みんと云おきなそれ
 (三三) さもいはれたりといひて大臣にかくなん申と
 (三四) いふ大臣こたへて云このかは、もろこしにもな
 (三五) かりけるをからうしてもとめたつねえたるなり
 (三六) なにのうたかひあらんさは申ともはや、き
 (三七) てみ給へといへは火の中にうちくへてやかせ

- (三八) 給ふにめらくとやけぬされはこそこと物の
 (三九) かはなりけりといふ大臣是をみ給ひてかほ
 (四〇) はくさのほのいろにてみ給へりかくやひめ
 (四一) はあなうれしとよろこひてあたりかよみ給
 (四二) ける歌の返しはこに入てかへす
 (四三) 名こりなくもゆとしりせはかはころも
 (四四) おもひのほかに置てみましを
 (四五) とありけるされはかへりいましにけり世の人
 (四六) くあへの大臣火ねすみのかは衣をもてい
 (四七) ましてかくやひめに住給ふとなこ、にやい
 (四八) ますなと、ふある人の云かは、火にくへて
 (四九) やきたりしかはめらくとやけにしかはかくや
 (五〇) ひめあひ給はずといひければこれを聞て
 (五一) そとけなきものをあへなしと云ける

第八段絵

〔第九段〕

- (一) 大とものみゆきの大納言はわか家にあり
 (二) とある人をあつめての給はくたつのくひ

- (三) に五しきのひかりある玉あなりそれをとりに
 (四) てたてまつりたらん人にはねかはん事を
 (五) ことをかなへんとの給ふおのことも仰の
 (六) 事をうけ給はりて申さく仰のことはいと
 (七) たうとした、しこの玉たはやすくえとら
 (八) しをいはんやたつのくひの玉はいか、とら
 (九) むと申あへり大納言の給ふ天のつかひと
 (一〇) いはんものはいのちをすて、もをのか君の
 (一一) おほせことをはかなへんところ思ふへけれこの
 (一二) 国になきてんしくもろこしの物にもあらず
 (一三) このくにのうみ山よりたつはおりのほる物也
 (一四) いかに思ひてかなんちらかたきものと申へき
 (一五) おのことも申やうさらはいか、はせんかたき
 (一六) もの成とも仰ことにしたかひてもとめに
 (一七) まからんと申に大納言見わつらひてなん
 (一八) ちらか君のつかひと名をなかしつ君の仰こ
 (一九) とをはいか、はそむくへきとの給ふたつのくひ
 (二〇) の玉とりにとて出したて給ふ此人くの
 (二一) みちのかてくひものに殿のうちのきぬわた
 (二二) せになどあるかきりとり出してつかわす此
- (二三) 人くともかへるまていもゐをして我はお
 (二四) らん此玉とりえては家にかへりくなどの
 (二五) 給はせたりをのくおほせうけ給はりてま
 (二六) かりぬたつのくひの玉とりえすはかへり
 (二七) くなとの給へはいつちもくあしのむきた
 (二八) らんかたへいなんすかゝるすき事をし給ふこ
 (二九) と、そしりあへり給はせたるものをのくわ
 (三〇) けつ、取あるひはをのか家にこもりゐ或は
 (三一) おのかゆかまほしきところへいぬおや君と
 (三二) 申共かくつきなきことをおほせ給ふこと、
 (三三) ことゆかぬものゆへ大納言をそしりあひ
 (三四) たりかくやひめすへんにはれいやうには見
 (三五) にくしとの給ひてうるはしき家をつくり
 (三六) 給ひてうるしをぬりまきゑして返し給て
 (三七) 屋のうえにはいとをそめていろくふかせ
 (三八) てうちくのしつらひにはいふへくもあらぬ
 (三九) あやをりものにゑをかきてまことはりた
 (四〇) るものめともはかくやひめをかならすあは
 (四一) むまうけしてひとりあかしくらし給ひつか
 (四二) はし、人はよるひるまち給ふにとしこゆるま

- (四三) てをともせず心もとなかりてしのひてた、
- (四四) とねり二人めしつきとしてやつれ給ひて
- (四五) なにはの辺におはしましてとひ給ふ事は
- (四六) 大伴の大納言の人や舟にのりてたつこ
- (四七) ろしてそかくひの玉とれるとや聞とは
- (四八) するに舟人こたへていはくあやしき事
- (四九) かなとわらひてさるわさする舟もなし
- (五〇) とこたうるにをちなきことする舟人にもある
- (五一) かなえしらてかくいふとおほしてわかゆみの
- (五二) ちからはたつあらはふといころしてくひの玉
- (五三) はとりてんをそくるやつはらをまたしと
- (五四) の給ひて舟にのりてうみことにありき
- (五五) いと、をくてつづくしのかたのうみにこきいて
- (五六) 給ひぬいか、しけんはやき風ふき世かいくら
- (五七) かりて舟をふきもてありくいづれの方共
- (五八) しらすふねを海中にまかりいりぬへくふき
- (五九) まはしてなみはふねにうちかけつ、まき入
- (六〇) 神はおちかゝる様にひらめきかゝるに大納
- (六一) 言はまといてまたかゝるわひしきめ見す
- (六二) いかならんとするそとの給ふかちとりこたへ
- (六三) て申こゝら舟にのりてまかりありくに
- (六四) またかゝるわひしきめを見すみ舟うみの
- (六五) そこにいらすは神おちかゝりぬへしもしさい
- (六六) はひに神のたすけあらはなんかいにふか
- (六七) れおはしぬへしうたてあるぬしのみもと
- (六八) につかふまつりてすゝるなるしにをすへ
- (六九) かめるかなとかんとりなく大納言これを
- (七〇) 聞てのたまはくふねにのりてはかちと
- (七一) りの申事をこそたかきやまとたのめ
- (七二) などかくたのもしけなく申そとあをへと
- (七三) をつきての給ふかちとりこたへて申神
- (七四) ならねはなにわさをかつかふまつらんかせ
- (七五) ふきなみはけしけれとも神さへいた、
- (七六) きにおちかゝるやうなるはたつをころさん
- (七七) ともとめたまへはあるなりはやてもりう
- (七八) のふかするなりはや神にいのりたまへ
- (七九) といふよき事なりとてかちとりの御神
- (八〇) きこしめせをとなくこゝろをさなくたつ
- (八一) をころさんとおもひけり今よりのちは毛
- (八二) 一すちをたにうこかしたてまつらしとよ

- (八三) ことをはなちてたちぬなくくよはひた
- (八四) まふ事千たひはかり申給ふけにやあらん
- (八五) やうく神なりやみぬ少ひかりて風はなを
- (八六) はやくふきかちとりのいはく是はたつのしは
- (八七) さにこそありけれふく風はよき方の風なり

第九段絵

〔第一〇段〕

- (一) あしき方の風にはあらずよき方におもむきて
- (二) ふく也といへ共大納言は是を聞入給はず三四
- (三) 日ふきて吹かへしよせたりはまをみればは
- (四) りまのあかしのはま成けり

※第十段は絵なし

【下巻翻刻】

〔第一段〕

- (一) 大納言なんかいはまに吹よせられたる
- (二) にやあらんと思ひていきつきふし給へ

- (三) り舟にあるおのことも国につけたれ共く
- (四) にのつかさまふてとふらふにもえおきあかり
- (五) 給はてふなそこにふし給へり松原にみむ
- (六) しろしきておろし奉る其時にそ南海にあら
- (七) さりけりと思ひてからうしておきあかり給へる
- (八) をみれば風いとおもき人にてはらいとふく
- (九) れこなたかなたのめにはすも、を二つつけ
- (一〇) たる様也これをみたてまつりてそ国のつ
- (一一) かさもほ、ゑみたるくに、仰給て手こしつく
- (一二) らせ給ひてにやうくになはれて家に入給
- (一三) ぬるをいかてかき、けんつかはし、おのことも
- (一四) まいりて申やうたつのくひの玉をえとら
- (一五) さりしかは南殿へもえまいらさりし玉の取かた
- (一六) かりしことをしり給へればなんかんたうあらし
- (一七) とてまひりつると申大納言おきあてのたま
- (一八) はくなんちらよくもてこす成ぬりうはなる神
- (一九) のるいにこそありけれそれか玉をとらんと
- (二〇) てそこの人くのかいせられんとしけり
- (二一) ましてたつをとらへたらましかは又こともな
- (二二) く我はかいせられなましよくとらへす成に

- (二三) けりかくやひめてふおほぬす人のやつか人
- (二四) をころさんとするなりけり家のあたりた
- (二五) に今はとほらし男とも、なありきそとて家
- (二六) に少のこりたりけるもの共はたつの玉をとら
- (二七) ぬものともにたひつこれを聞てはなれ給
- (二八) ひしものうへはかたはらいたくわらひ給ふい
- (二九) とをふかせつくりし屋はとひからすのすにみな
- (三〇) くひもていにけり世かいの人のいひけるは
- (三一) 大伴の大納言はたつのくひの玉とりて
- (三二) おはしたるいなさもあらず御まなこ二つに
- (三三) すも、のやうなる玉をそそへていましたる
- (三四) といひければあなたへかたといひけるよ
- (三五) りそ世にあはぬ事をはあなたへかたとは
- (三六) いひはしめける

第一段絵

〔第二段〕

- (一) 中納言いそのかみのまろたかの家につかはる
- (二) るをのことものもとにつはくらめのすく

- (三) ひたらはつけよとの給ふをうけ給はりてな
- (四) にのようにかあらんと申こたへての給ふや
- (五) うつはくらめのもたるこやすかひをとらん
- (六) れうなりとの給ふおのこともこたへて申つ
- (七) はくらめをあまたころしてみるたにもはらに
- (八) なきものなりた、し子うむときなんいかて
- (九) かいたすらんと申人たにみれはうせぬと
- (一〇) 申又人の申やうおほいつかさのいひかしく
- (一一) 屋のむねにつくのあることにつはくらめは
- (一二) すをくひ侍るそれにまめならんおのことも
- (一三) おひてまかりてあくらをゆひあけてうか
- (一四) かはせんにそこのつはくらめ子うまさら
- (一五) むやはさてこそとらしめ給はめと申す
- (一六) 中納言よろこひ給ひておかしきことにも
- (一七) あるかなもつともえしらさりけりけうある
- (一八) こと申たりとの給ひてまめなるおのこと
- (一九) も廿人はかりつかはしてあな、ひにあけすへ
- (二〇) られたり殿よりつかひひまなく給はせて
- (二一) こやすのかひとりたるかとはせ給ふつは
- (二二) くらめも人のあまたのほりゐたるにおち

- (二三) てすにのほりこす
- (二四) かゝるよしの返事を申ければ
- (二五) 聞給ひていかゝすへ
- (二六) とおほしわつら
- (二七) ふに
- (一一) て鳥の子うまん間につなをつりあけ
- (一二) させてふとこやすかひをとらせ給ひなは
- (一三) よかるへきと申中納言の給ふやういとよき
- (一四) ことなりとてあななひをこほち人みなか
- (一五) へりまうてきぬ中納言くらつまるにの
- (一六) 給はくつはくらめはいかなる時にか子をうむ
- (一七) としりて人をはあくへきとの給ふくらつまる
- (一八) 申やうつはくらめ子うまんとする時は尾をさ
- (一九) さけて七度めぐりてなんうみおとすめるさ
- (二〇) く七度めぐらんおりひきあけてそのおりこや
- (二一) すかひはとらせ給へと申中納言よろこひ給
- (二二) て万の人にもしらせ給はてみそかにつか
- (二三) さにいましてをのこともの中にましりて
- (二四) よるをひるになしてとらしめ給ふくら
- (二五) つまるかく申をいといたくよろこひての
- (二六) 給ふこゝにつかはるゝ人にもなきにねかひ
- (二七) をかなふることのうれしさとの給ひて御そ
- (二八) ぬきてかつけ給ふつさらによさりこのつか
- (二九) さにまうてことの給ふてつかはしつ日くれ
- (三〇) ぬれはかのつかさにおはしてみ給ふにまことに

第二段絵

〔第三段〕

- (一) 彼つかさの官人くらつまると申おきな申や
- (二) うこやすかひとらんとおほしめさはたは
- (三) かり申さんとて御まへにまひりたれば中
- (四) 納言ひたひをあはせてむかひ給へりくら
- (五) つまろか申やうこのつはくらめこやすかひ
- (六) はあしくたはかりてとらせ給ふなりさて
- (七) はえとらせ給はしあななひにおとろくし
- (八) く甘人上りて侍れはあれてよりまうて
- (九) こすなりせさせ給ふへきやうは此あなゝひ
- (一〇) をこほちて人みなしりそきてまめならん
- (一一) 人一人をあらこにのせすへてつなをかまへ

- (三二) つはくらめすつくれりくらつまる申やうを
- (三三) うけてめくるあらこに人をのほせてつり
- (三四) あけさせてつはくらめのすに手をさし
- (三五) いれさせてさくるにもものなしと申に
- (三六) 中納言あしくさくれはなきなりとはら立
- (三七) てたれはかりおほえんにとてわれのほり
- (三八) てさくらんとの給ひてこにのりてつられ
- (三九) 上りてうかゝひ給へるにつはくらめ尾を
- (四〇) さけていたくめくるにあはせて手をさゝけ
- (四一) てさくり給ふに手にひらめるものさはる時に
- (四二) 我ものにきりたり今はおろしてよおきな
- (四三) しえたりとの給ひてあつまりてとくおろ
- (四四) さんとてつなを引過してつゆたゆるすなはち
- (四五) にやしまのかなへのうえにのけさまにおち
- (四六) 給へり人くゝあさましかりてよりてかなへた
- (四七) てまつり御目はしらめにてふし給へり人々
- (四八) 水をすくひ入奉るからうしていき出給へる
- (四九) に又かなへの上より手とりあし取してさけ
- (五〇) おろし奉るからうして御こゝちはいか、おほさ
- (五一) る、ととへはいきのしたにて物は少おほゆれ
- (五二) とこしなんうこかれぬされとこやすかひを
- (五三) ふとにきりもたれはうれしくおほゆるなり
- (五四) まつしそくさしてこゝのかひかほ見んと御く
- (五五) しもたけて御手をひろけ給えるにつはくら
- (五六) めのまりをけるふるくそをにきり給へる
- (五七) なりけりそれを見給ひてあなかひなの
- (五八) わさやとの給ひけるよりそ思ふにたかふ事
- (五九) をはかひなしといひけるかひにもあらずとみ
- (六〇) 給ひけるに御心ちもたかひてからひつの
- (六一) ふたの入られ給ふへくもあらず御こしはおれ
- (六二) にけり中納言はわらわけたるわさしてやむ
- (六三) ことを人にきせしとし給ひけれとそれを
- (六四) やまひにていとよはく成給ひにけりかひ
- (六五) をえとらすなりにけるよりも人のきゝわら
- (六六) はん事を日にそへて思ひ給ひければたゝに
- (六七) やみしぬるよりも人きゝはつかしくおほえ
- (六八) 給ふなりけりこれをかくやひめ聞てとふら
- (六九) ひにやる歌
- (七〇) としをへてなみたちよらぬすみの江の
- (七一) まつかひなしとさくはまことか

- (七二) とあるをよみてきかすいとよはき心にかしら (九二) たちにもあらずいかてか見ゆへきといへは
 (七三) もたけて人にかみをもたけてくるしきこ、 (九三) うたても給ふかなみかとの御つかひをは
 (七四) ちからうしてかき給ふ (九四) いかてかをろかにせんといへはかくやひめの
 (七五) かひはなくありけるものをわひはて、 (九五) こたふるやう御門のめしてのたまはん事
 (七六) しぬるいのちをすくひやはせぬ (九六) かしこしもおもはずといひてさらにみゆへ
 (七七) とかきはつるたえ入給ひぬ是を聞てかくや (九七) くもあらずむめる子のやうにあれといと心
 (七八) ひめ少あはれとおほしけりそれよりなん少 (九八) はつかしけにをろそかなるやうにいひけれ
 (七九) うれしきことをはかひありとはいひけるさて (九九) はこゝろのまゝにもえせぬすなわしのもとに
 (八〇) かくやひめかたちの世ににすめてたき事を (一〇〇) かへり出てくちおしくこのおさなきものは
 (八一) みかときこしめして内侍なかとみのふさこ (一〇一) こはく侍るものにてたいめんすましきと申
 (八二) への給おほくの人の身をいたつらになして (一〇二) ないしかならずみたてまつりてまいれと
 (八三) あはさるかくやひめはいかはかりの女そとまかり (一〇三) おほせことありつるものをみたてまつらて
 (八四) て見てまいれとの給ふふさこうけ給はりて (一〇四) はいかてかかへりまいらん
 (八五) まかれり竹とりの家にかしこまりてしやうし
 (八六) いててあへり女にないしの給ひおほせことに
 (八七) かくやひめのうちいうにおはすなりよく見
 (八八) てまいるへきよしの給はせつるになんまいり
 (八九) つるといへはさらはかく申侍らんといひて
 (九〇) いらぬかくやひめにはやかのみつかひに
 (九一) たいめんし給へといへはかくやひめよきか

第三段絵

〔第四段〕

- (一) こくわうのおほせことをまさに世に住給はん
 (二) 人のうけ給はり給はてありなんやいはれ
 (三) ぬことなし給ひそとこととはちしくいひけ

- (四) れはこれをきゝてましてかくやひめきくへく
(五) もあらずこくわうのおほせ事をそむかは
(六) はやころし給てよかしといふ此尚侍かへりま
(七) いらてこのよしをそうすみかときこしめして
(八) おほくの人ころしてける心そかしとの給ひて
(九) やみにけれとなをおほしおはしましてこの女
(一〇) のたはかりにやまけんとおほして仰給ふなん
(一一) ちかもちて侍るかくやひめ奉れかほかたち
(一二) よしときこしめして御つかひたひしかとかひ
(一三) なくみえず成にけりかくたいくしくやは
(一四) ならはすへきと仰らるゝおきなかしこまつて
(一五) 御返事申やうこのめのわらはゝたへてみや
(一六) つかへつかふまつるへくもあらず侍るをもて
(一七) わつらひ侍さり共まかりておほせ給はんと
(一八) そうすこれをきこしめして仰給ふなとかお
(一九) きなのおほしたてたらんものを心にまかせ
(二〇) さらん此女もし奉りたるものならはおきなな
(二一) かうふりをなとかたはせさらんおきなよろ
(二二) こひて家にかへりてかくやひめにかたらふ
(二三) やうかくなんみかとの仰給へるなをやはつ
- (二四) かうまつり給はぬといへはかくやひめこたへて
(二五) 云もはらさやうのみやつかへつかふまつらし
(二六) とおもふをしみてつかふまつらせ給はゝきえ
(二七) うせなんすみつかさかうふりつかふまつりし
(二八) ぬはかりもおきないらふる様なしたまひそ
(二九) かうふりもわか子をみ奉らては何にかせんさ
(三〇) はありともなとか官つかへをし給はさらん死
(三一) 給ふへきやうやあるへきといふなをそらこと
(三二) かとつかまつらせてしなすやあると見た
(三三) まへあまたの人の心さしをろかならさりし
(三四) をむなしくなしてこそあれきのふけふ
(三五) みかとの給はんことにつかん人きゝやさし
(三六) からしといへはおきなこたへていはく天下の
(三七) 事はと有ともかゝりとも御いのちのあや
(三八) うきこそおほきなるさはりなればなをつ
(三九) かふまつるましきことをまいりて申さんどて
(四〇) いそきまいりて申やうおほせのことのかし
(四一) ござにかのわらはをまいらせんとてつかう
(四二) まつれば官つかへにいたしたておはしぬへし
(四三) と申官つこまろか手にうませたる子にても

- (四四) あらすむかし山にて見つけたるか、れは心ほせ
- (四五) も世の人にす侍るとそうせさすみかと
- (四六) おほせの給はくみやつこまろか家は山もと
- (四七) ちかくなりみかりみゆきし給はん様にてみ
- (四八) てんやとの給はすみやつこまろか申やう
- (四九) いとよき事成何か心もなくて侍らんによと
- (五〇) みゆきして御らんせられなんとそうすれ
- (五一) はみかとはかに日をさためてみかりに
- (五二) いて給ふてかくや姫の家に入給ふて見給
- (五三) にひかりみちてけうらにてゐたる人有これ
- (五四) ならんとおほしてにけて入袖をとらへ給へはお
- (五五) もてをふたきて侍へとはしめよく御らんし
- (五六) つれはたくひなくめてたくおほえさせ給ひて
- (五七) ゆるさしとすとてゐておはしまさんとするに
- (五八) かくやひめこたへてそうすをのか身は此く
- (五九) に、生れて侍らはこそつかひ給はめいとゐ
- (六〇) ておはしましかたくや侍らんとそうすみかと
- (六一) などかさあらんなをゐておはしまさんとて
- (六二) みこしをよせ給ふに此かくや姫きとかけに
- (六三) なりぬはかなくくちおしとおほしてけにた、
- (六四) 人にはあらさりけりとおほしてさらは御とも
- (六五) にはゐていかしもの御かたちとなり給ひね
- (六六) それを見てたにかへりなんと仰らるれば
- (六七) かくや姫もとのかたちに成ぬみかとなを
- (六八) めてたくおほしめさる、事せきとめかたし
- (六九) かくみせつる宮つこまるをよろこひ給ふ
- (七〇) さてつかふまつる百くはん人くあるしいか
- (七一) めしうつかふまつるみかとかくやひめをと、
- (七二) めてかへり給はん事をあかすくちおほしく
- (七三) おほしけれと玉しゐをと、めたるこ、ちし
- (七四) てなんかへらせ給ひけるみこしにたてまつり
- (七五) てのちにかくや姫に
- (七六) かへるさのみゆきものうくおもほえて
- (七七) そむきてとまるかくや姫ゆへ
- (七八) 御返事
- (七九) むくらはふ下にもとしは
- (八〇) へぬる身の何かは
- (八一) 玉のうなをも
- (八二) みん

第四段絵

〔第五段〕

- (一) これを御門御らんしていか、かへり給はんそら
(二) もなくおほさる御心はさらにたちかへるへ
(三) くもおほされさりけれとさりとて夜をあ
(四) かし給ふへきにあらねはかへらせ給ひぬつね
(五) につかふまつる人を見給ふにかくやひめのかた
(六) はらによるへくたにあらさりけりこと人よ
(七) りはけうらなりとおほしける人のかれに
(八) おほしあはすれは人にもあらずかくや姫のみ御
(九) 心にかゝりてたゝひとり過し給ふよしなく御
(一〇) かた／＼にもわたり給はずかくやひめの御もと
(一一) にぞ御文をかきてかよはさせ給ふ御かへりさ
(一二) すかににくからすきこえかはし給ひておも
(一三) しろく木草につけても御歌をよみて
(一四) つかはすかやうにて御心をたかひになくさ
(一五) め給ふほとに三年はかりありて春のはしめ
(一六) よりかくや姫月のおもしろういてたるを見
(一七) てつねよりも物思ひたる様なりある人の月

- (一八) かほみるはいむこと、せいしけれともすれは人ま
(一九) にも月を見てはいみしくなき給ふ七月十五日
(二〇) の月に出ゐてせちにものおもへるけしきなり
(二一) ちかくつかはるゝ人／＼竹取のおきなにつけて
(二二) 云かくやひめれいも月をあはれかり給へとも
(二三) このころとなりてはたゝことにも侍らさめ
(二四) りいみしくおほしなげく事あるへしよく
(二五) 見奉らせ給へといふを聞てかくやひめに云
(二六) 様なんてう心ちすれはかくものを思ひたる様
(二七) にて月をみ給ふそうましき世にといふかく
(二八) や姫みれはせけん心ほそくあはれ侍るなてう
(二九) ものをかなげき侍るへきと云かくやひめの
(三〇) ある所にいたりてみれはなを物思へるけし
(三一) きなり是を見てあか仏なに事思ひ給ふ
(三二) そおほすらん事何ことそといへはおもふ事もなし
(三三) ものなん心ほそくおほゆるといへはおきな月
(三四) なみ給ふそ是を見給へはものおほすけしきは
(三五) あるそといへはいかて月を見てはあらんとて
(三六) なを月出れは出ゐつゝなげき思へり

〔第六段〕

- | | | | |
|------|------------------------|------|-------------------------|
| (一) | ゆふやみには物思はぬけしきなり月のほとに | (二一) | をおはせしをわかたけたちならふまでやし |
| (二) | 成ぬれはなを時々は打なげきなとす是を | (二二) | なひ奉たるわか子を何人かむかへきこえん |
| (三) | つかふものともなをものおほす事あるへし | (二三) | まさにゆるさんやといひて我こそしなめ |
| (四) | とさ、やけとおやをはしめてなにごと、も | (二四) | とてなきの、しる事いとたへかたけ也かくや姫 |
| (五) | しらす八月十五日はかりの月に出ゐてかくや | (二五) | 云月のみやこの人にて父母ありかた時の間と |
| (六) | ひめいといたくなき給ふ人めも今はつゝ、み給は | (二六) | てかのくによりまうてこしかともかく此くに、は |
| (七) | すなき給ふこれを見て親とも、なに事そと | (二七) | あまたのとしをへぬるになんありけるかのくに |
| (八) | とひさはかくや姫なくく云先々も申さん | (二八) | の父母の事もおほえすこゝにはかく久しくあ |
| (九) | と思ひしかともかならす心まとはし給はんものそ | (二九) | そひきこえてならひ奉れりいみしからん心ちも |
| (一〇) | と思ひて今まで過し侍りつる也さのみやは | (三〇) | せずかなしくのみあるされとおのか心ならずま |
| (一一) | とて打出侍りぬるそをのか身は此くにの人に | (三一) | かりなんとするといひてもろともにいみしう |
| (一二) | もあらず月の宮この人なりそれをなんむかしの | (三二) | なくつかはるゝ人もとしころならひて立わかれなん |
| (一三) | ちきりありけるによりなん此世かいはまう | (三三) | ことを心はへなとあてやかにうつくしかりつるこ |
| (一四) | てきたりける今はかへるへきに成にければ此 | (三四) | とをみならひてこひしからんことのためかたくゆ |
| (一五) | 月の十五日にかのものくによりむかへに人々 | (三五) | みつのまれす同し心になけかしかりけり此事を |
| (一六) | まうてこんすさらすまかりぬへければおほ | (三六) | 御門きこしめして竹とりか家に御つかひつかは |
| (一七) | しなげかかなかなしき事をこの春よりお | (三七) | させ給ふ御つかひに竹取いてあひてなく事 |

- (三八) かきりなしこの事をなけくにひけもしろく
- (三九) こしもか、まりめもた、れにけりおき今年
- (四〇) は五十はかりなりけれとも物思ひにはかたとき
- (四一) なん老に成にけりと見ゆ御つかひおほせ
- (四二) こととおきなに云いと心くるしく物思ふ
- (四三) なるはまことにかと仰給ふ竹とりなく、申この
- (四四) 十五日になん月の都よりかくや姫のむかへにまう
- (四五) てくなるたうとくとはせ給ふこの十五日には人
- (四六) く、給はりて月のみやこの人まうてこはとらへ
- (四七) させんと申御使かへりまひりておきな有
- (四八) さま申てそうしつること、も申を聞召ての
- (四九) 給ふ一めみ給ひし御心にたに忘れ給はぬにあ
- (五〇) けくれみなれたるかくやひめをやりていか、お
- (五一) もふへきかの十五日つかさくにおほせてちよ
- (五二) く少将高野のおほくと云人をさして六
- (五三) 衛のつかさ合て二千人の人を竹取か家につか
- (五四) はす家にまかりてついちの上に千人屋の上
- (五五) に千人家の人くおほかりけるに合てあける
- (五六) ひまもなくまもらすこのまもる人々もゆみや
- (五七) をたいしておもやの内には女ともはんにおりて
- (五八) まもらす女ぬりこめのうちにかくや姫をいた
- (五九) かへておりおきなもぬりこめの戸さしてとく
- (六〇) ちにおりおきな云かはかり守る所に天の
- (六一) 人にもまけむやといひて屋のうへにおる人々に
- (六二) いはく露もものそらにかけらはふといころし給へ
- (六三) まもる人く云かはかりしてまもる所にかは
- (六四) り一たにあらはまついころして外にさらさんと
- (六五) 思い待るといふおきな是を聞てたのもしかり
- (六六) おり是を聞てかくや姫はさしこめてまもりた、
- (六七) かふへきしたくみをしたたり共あのかのくにの人を
- (六八) えた、かはぬ也弓矢していられしかくさしこめて
- (六九) 有とも彼国の人くはみなあきなんとすあひ
- (七〇) た、かはんとす共かのくにの人きなはたけき心つ
- (七一) かう人もよもあらしおきな云様御むかへに
- (七二) こん人をは長きつめしてまなこをつかみつふ
- (七三) さんさか、みをとりにてかなくなりおとなんさか
- (七四) しりをかき出てこ、らのおほやけ人にみせ
- (七五) てはちを見せんとはらたちおるかくや姫
- (七六) いはくこわたかになの給ひそ屋の上をる
- (七七) 人ともきくにいとまさないますかりつる

- (七八) 心さしともをおもひもしらてまかりなんする
 (七九) ことの口をしう侍けり長契りのなかりければ
 (八〇) ほとなくまかりぬへきなめりと思ひかなし侍也
 (八一) おやたちのかへりみをいさゝかたにつかふまつら
 (八二) てまからん道もやすくも有ましきに日比も出る
 (八三) てことし斗のいと間を申つれとさらにゆるされ
 (八四) ぬによりてなんかく思ひ歎き侍る御心をの
 (八五) みまとはしてさりなんことのかなしくたへかた
 (八六) く侍也かの都の人はいとけうらにおひをせす
 (八七) なん思ふ事もなく侍る也さる所へまからんす
 (八八) るもいみしく侍らす老おとろへ給へるさまを
 (八九) 見奉らさらん事恋しからめといひておきな
 (九〇) むねいたきことなし給ふそうるはしきすかた
 (九一) したる使にもさはらしとねたみおり

第六段絵

〔第七段〕

- (一) かゝるほとによひうち過てねのこくはかりに
 (二) 家のあたりひるのあかさにもすきてひかり

- (三) たりもち月のあかさを十あはせたるはかり
 (四) にてある人のけのあなさへ見ゆるほど也
 (五) 大そらより人雲にのりておりきて土より
 (六) 五しやくはかりあかりたるほどにたちつらねた
 (七) り内外なる人の心とも物におそはるゝやう
 (八) にてあひたゝかはん心もなかりけりからうして
 (九) 思ひおこしてゆみやをとりたてんとすれ共
 (一〇) 手にちからもなくなりてなへかゝりたる中に
 (一一) 心さかしきものねんしていんとすれともほか
 (一二) さまへいきければあれもたゝかはて心ちたゝし
 (一三) れにしたらてまもりあへりたてる人ともはさう
 (一四) そくのきよなる事物にもにすとふ車一くし
 (一五) たりらかいさしたりその中に王とおほしき人
 (一六) つこまる家にまうてこといふにたけく思つる
 (一七) 宮つこまるも物にえひたる心ちしてうつふしに
 (一八) ふせりいはくなんちおさなき人いさゝか成くと
 (一九) くをおきなつくりけるによりてなんちかたす
 (二〇) けにとてかた時のほとゝてくたしゝをそこら
 (二一) の年ころそこのかね給ひて身をかへたるか
 (二二) ことく成にけりかくや姫はつみをつくり給へり

- (二三) ければかくいやしきをのれかもとにしはしお
- (二四) はしつるなりつみのかきりはてぬれはかくむかふ
- (二五) るおきなはなきなけくあたはぬ事也はや
- (二六) 返し奉れといふおきなこたへて申かくやひめ
- (二七) をやしなひ奉る事廿余年に成ぬかた時と
- (二八) の給ふにあやししく成侍りぬ又こと所にかくや
- (二九) 姫と申人そおはしますらんと云こ、におはす
- (三〇) るかくやひめはおもきやまひをし給へはえいて
- (三一) おはしますましと申せはその返事はなくて屋の
- (三二) うへにとふくるまをよせていさかくやひめ
- (三三) きたなきところにかてか久しくおはせんと
- (三四) いひたてこめたるところの戸すなはちた、
- (三五) あきにあきぬかうしとも、人はなくしてあ
- (三六) きぬ女いたきてあたるかくや姫とにいて
- (三七) ぬえと、むましければ

第七段絵

〔第八段〕

- (一) た、さしあふきてなきおり竹取心まとひ

- (二) てなきふせるところによりてかくや姫
- (三) いふこ、にも心にもあらてかくまかるのに
- (四) ほらんをたに見をくり給へといへ共何しにかな
- (五) しきに見をくり奉らんわれをいかにせよ
- (六) とてすて、はのほり給ふそくしてゐておは
- (七) せねとなきてふせれば御心まとひぬ文を
- (八) かきをきてまからんこひしからん折々取出て
- (九) 見給へとて打なきてかくことはこの国に
- (一〇) 生れぬるとならはなげかせら奉ぬほとまて
- (一一) 侍らて過わかれぬる事返すくほいなくこ
- (一二) そおほえ侍れぬきをく絹をかたみとみ給へ
- (一三) 月の出たらん夜は見をこせ給へ見すて奉りて
- (一四) まかる空よりもおちぬへき心ちするとかき
- (一五) をく天人の中にもたせたるはこ有天の
- (一六) はころもいれり又あるは不死のくすり入り
- (一七) ひとりの天人云つほなる御くすり奉れきた
- (一八) なき所のものきこしめしたれば御心ちあし
- (一九) からん物そとてもよりたれはいさ、かなめ
- (二〇) 給ひて少かたみとてぬきをく衣につ、まん
- (二一) とすれはある天人つ、ませす御そを取出して

- (二二) きせんとすその時にかくやひめしはしまて
- (二三) といひきぬきせつる人は心ことに成なり
- (二四) といふもの一こといひをくへき事ありけりと
- (二五) いひて文かくや姫ものをしらぬ事なの給ひそとて
- (二六) 給ひかくや姫ものしらぬ事なの給ひそとて
- (二七) いみしくしつかにおほやけに御文奉り給
- (二八) あわてぬさまなりかくあまたの人を給ひ
- (二九) てと、めさせ給へとゆるさぬむかへまうて
- (三〇) きてとりいてまかりぬれはくちおしくか
- (三一) なしきこと宮つかえつかふまつらすなりぬる
- (三二) もかくわつらはしき身にて侍れは心えす
- (三三) おほしめされつらめとも心つよくうけ給はら
- (三四) す成にしことなめけなるものに思召と、めら
- (三五) れぬるなん心にとまり侍ぬとて
- (三六) 今はとてあまの羽ころもきるおりそ
- (三七) 君をあはれと思ひ出たる
- (三八) とてつほのくすりそへて頭中将をよ
- (三九) ひよせて奉らす中将に天人とりて
- (四〇) つたふ中将とりつればふとあまの羽ころ
- (四一) もうちぎせ奉りつればおきなをいとほし

第八段絵

- (四二) かなしとおほしつる事もうせぬ此きぬきつる
- (四三) 人は物思ひなく成にければ車にのりて百
- (四四) 人はかり天人くして上りぬその、ちおきな
- (四五) 女ちのなみたをなかしとてまへとかひなし
- (四六) あのかきをきし文をよみてきかせけれと
- (四七) なにせんにかいのちもおしからんたかために
- (四八) かなに事もようもなしとてくすりもくは
- (四九) すやかておきもあからてやみふせり

〔第九段〕

- (一) 中将人くひきくしてかへりまいりてかく
- (二) や姫をえた、かひと、めす成ぬるをこま
- (三) くとそうすくすりのつほに御文そへて
- (四) まひらすひろけて御らんしていとあはれ
- (五) からせ給ひて物もきこしめさす御あそひ
- (六) などもなかりけり大臣かんたちめをめし
- (七) ていつれのやまか天にちかきと、はせ給ふに
- (八) ある人そうするかの国にあるなる山なん

- (九) 此宮こもちかくてんもちかく侍るとそうす
- (一〇) これを聞せ給ひて
- (一一) あふこともなみたにかふわかみには
- (一二) 死なぬくすりも何にかはせん
- (一三) かのたてまつるふしのくすりにふみつほ
- (一四) くして御つかひに給はずちよくしには月
- (一五) のいはかさといふ人をめしてするかのくに
- (一六) にあなる山のいたゝきにもてつくへきよ
- (一七) しおほせ給ふみねにてすへきやうをし
- (一八) へさせ給ふ御文ふしのくすりのつほなら
- (一九) へて火をつけてもやすへきよしおほせ
- (二〇) 給ふそのよしうけ給はりてつはものともあ
- (二一) またくしてやまへのほりけるよりなんその
- (二二) 山をふしのやまとはなつけるそのけふり
- (二三) いまた雲の中へたちのほとそいひつ
- (二四) たへたる

※第九段は絵なし

おわりに

筆者が担当する授業では、しばしば図書館にて所蔵絵巻の閲覧を実施している。日ごろはモノクロのコピーやプロジェクトの画像を通じてしか見ることでできない対象の「本物」に触れ、自ら繰り広げて鑑賞することによって、多くの参加学生に驚きと喜びを伴った感動が深く刻まれている。コピーなどの代替物では観察しきれない細部が、原本を前にすると鮮やかに浮かび上がってくる。触れることは「読むこと・見ること」に直結する。図書館での閲覧を通じて、絵巻の大きさ、重量感、質感、におい、詞書と絵の比率などを的確に把握することは、作品理解に大いに役立っているのである。

- 1 「竹取物語絵巻」諸本については、徳田進『竹取物語絵巻の系譜究稿守部作竹取物語絵巻への展開』（桜楓社、一九七八年）参照。
- 2 國學院本については、針本正行「國學院大學所蔵の絵入り物語」（『中古文学』八十六号、二〇一〇年）参照。
- 3 郷家忠臣「利仁草紙」（共立女子大学・共立女子短期大学図書館「図書館だより」六、一九九七年参照）。
- 4 山本聡美「共立女子大学図書館所蔵『竹取物語絵巻』を用いた変体仮名教材制作」（『総合文化研究所紀要』二二、二〇一六年）参照。